

09

計画演習 II A

1. 神戸ウォーターフロント マスタープラン課題

開講年次：学部4年生第1クォーター

[担当教員]

課題説明：近藤民代(准教授) 栗山尚子(准教授)

指導：所属研究室教員

■課題趣旨

神戸のウォーターフロントは緑豊かな六甲山系と大阪湾の青い海に挟まれた日本を代表する港町である。開港以来、もの、人、文化のゲートウェイとしての役割を果たし、神戸独自の都市的な文化を醸成してきた。

しかし、近年港湾部の工業や物流の衰退に伴いウォーターフロントの未来へのビジョンが問われている。ウォーターフロントの再生は世界的な課題であり、アメリカ・シアトル市においても老朽化の進んだ高架高速道路の地下化及び港湾防波堤・インフラの更新、そしてダウンタウンと水辺をつなげて国際的な都市の競争力を高めるための取り組みが今まさに始まっている。

今回の課題「神戸ウォーターフロント」は2つの面的な敷地を対象に、ウォーターフロントのビジョンを環境、文化、生態、安全、健康、アクティビティなど包括的な視点から考えることとする。既存の都心エリアの魅力や既存の公共空間や公園などランドスケープ資源を活用しつつ、道路や港湾など土木施設のリノベーション、そして海と都市をつなげて世界的な神戸ウォーターフロントを構想するための計画を提案してほしい。

■敷地 (別紙地図)

計画地区は、別紙地図に示す神戸市のウォーターフロント及びその周辺地域を含む A、B のうちいずれか一つを選択する。地区特性、土地利用、ウォーターフロントへのアクセス等を考慮すること。

■A 地区：都心ウォーターフロント地区

A1：みなとのもり公園 2 期、第 1～第 3 突堤、

波止場町 1 丁目、東遊園地～神戸市役所付近

A2：メリケンパーク、ポートタワー周辺

拠点オープンスペース：東遊園地 (A1)、メリケン広場 (A2) など

■B 地区：兵庫運河ウォーターフロント地区

B1：新川運河

B2：兵庫運河

拠点オープンスペース：神戸市卸売市場跡地 (B1)、兵庫運河旧貯木場周辺 (浜山キャナルプロムナード・浜山小学校・ものづくり復興工場付近) (B2) など



A 地区：都心ウォーターフロント地区

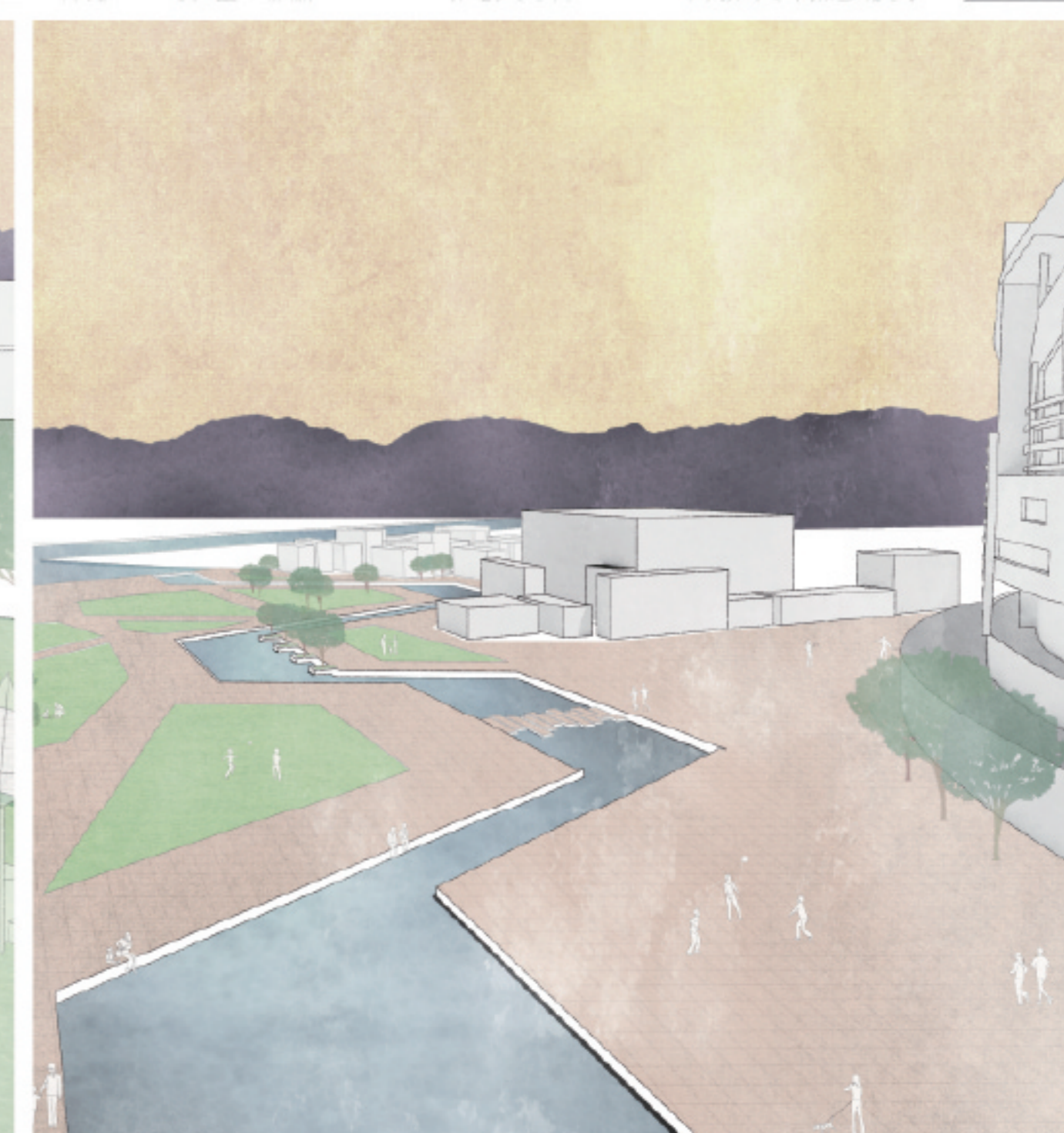
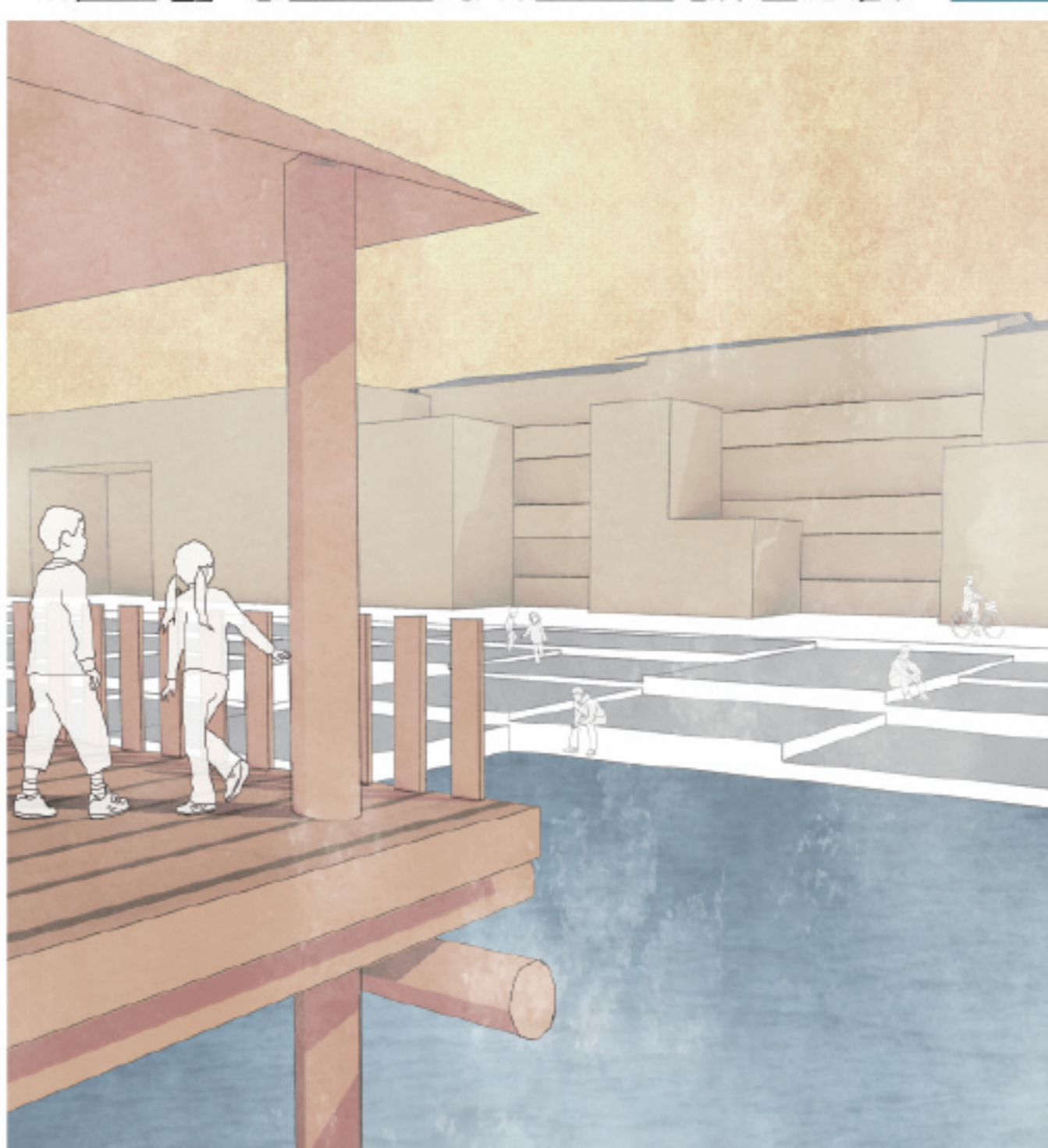
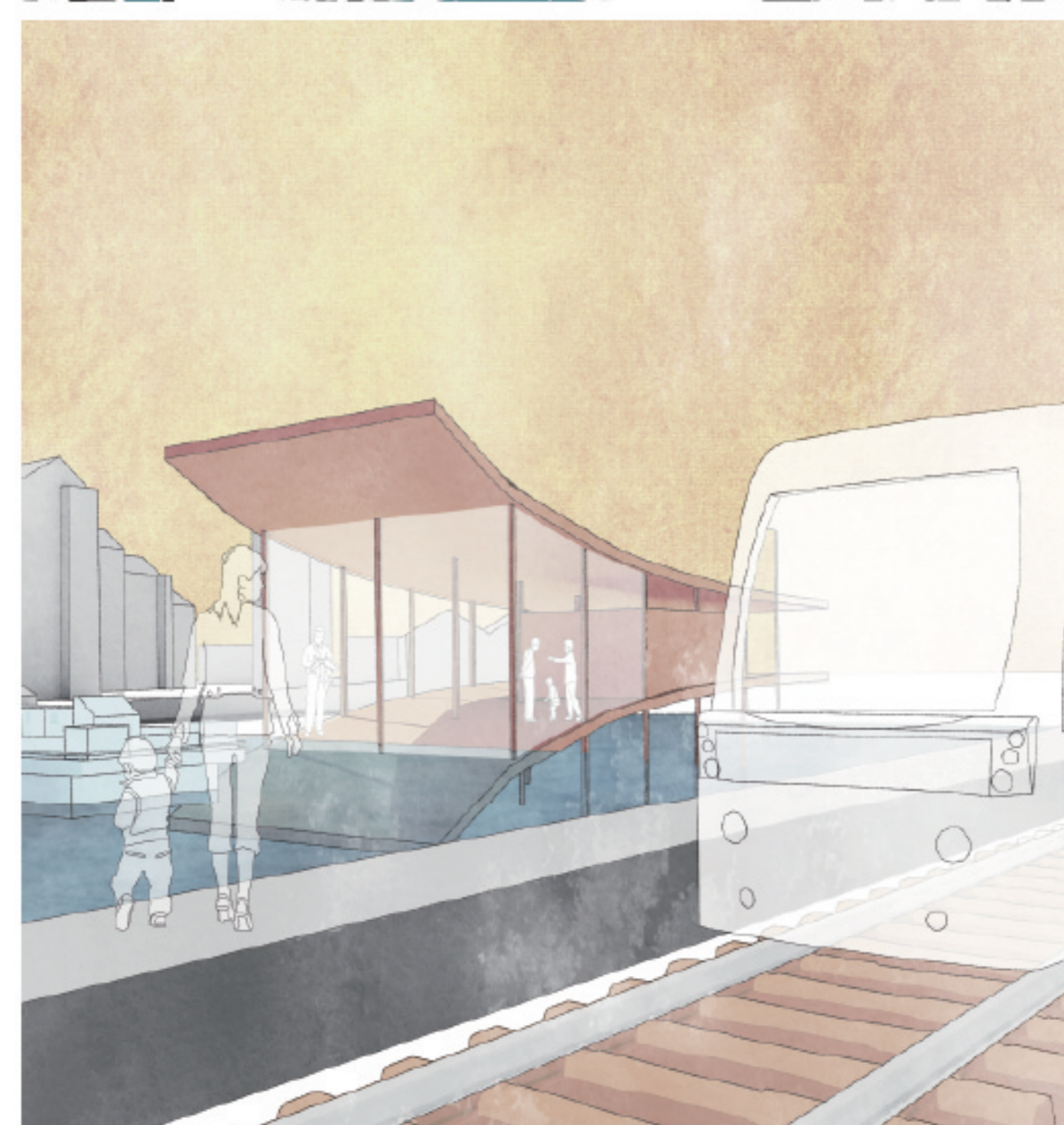
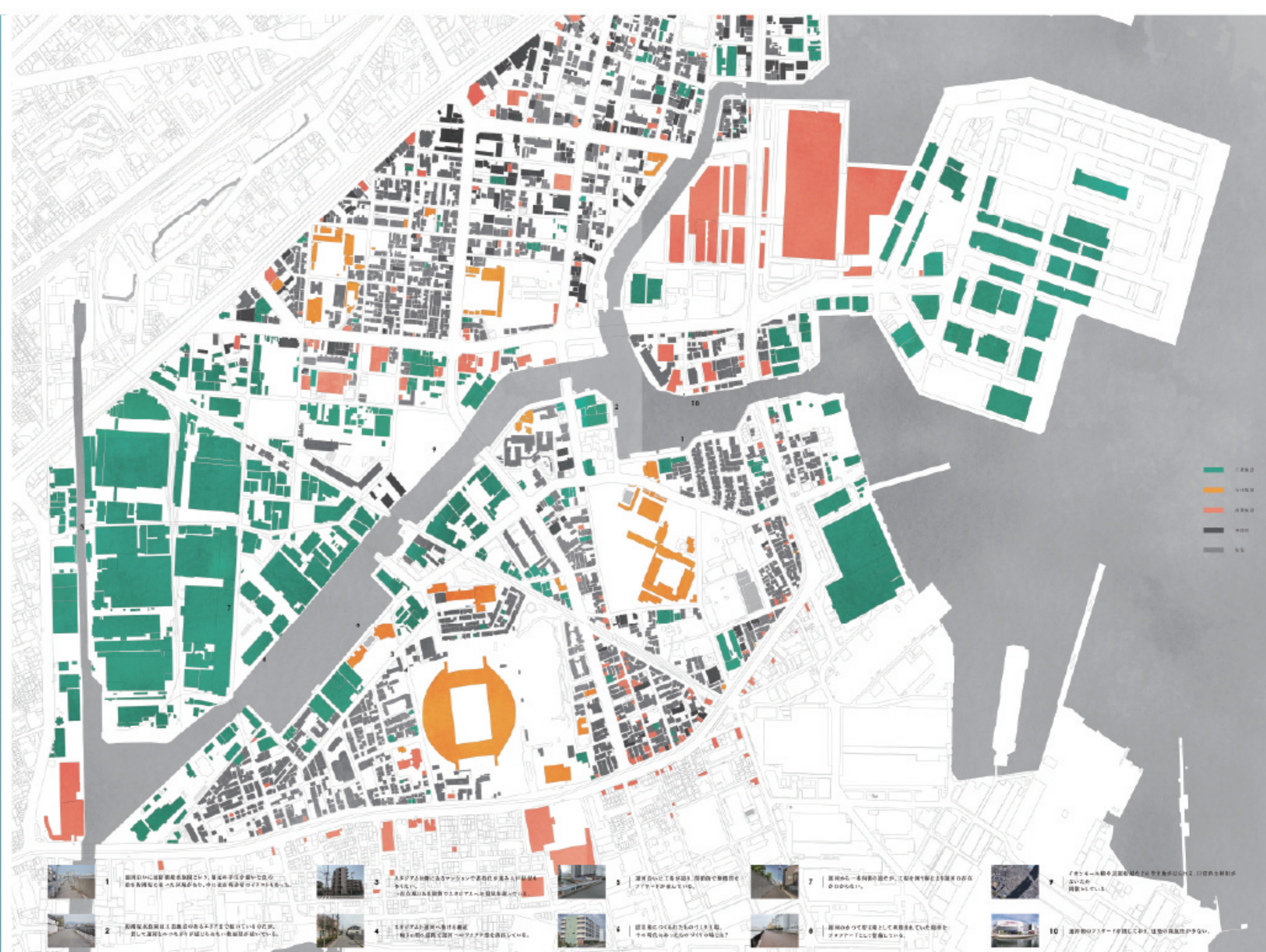
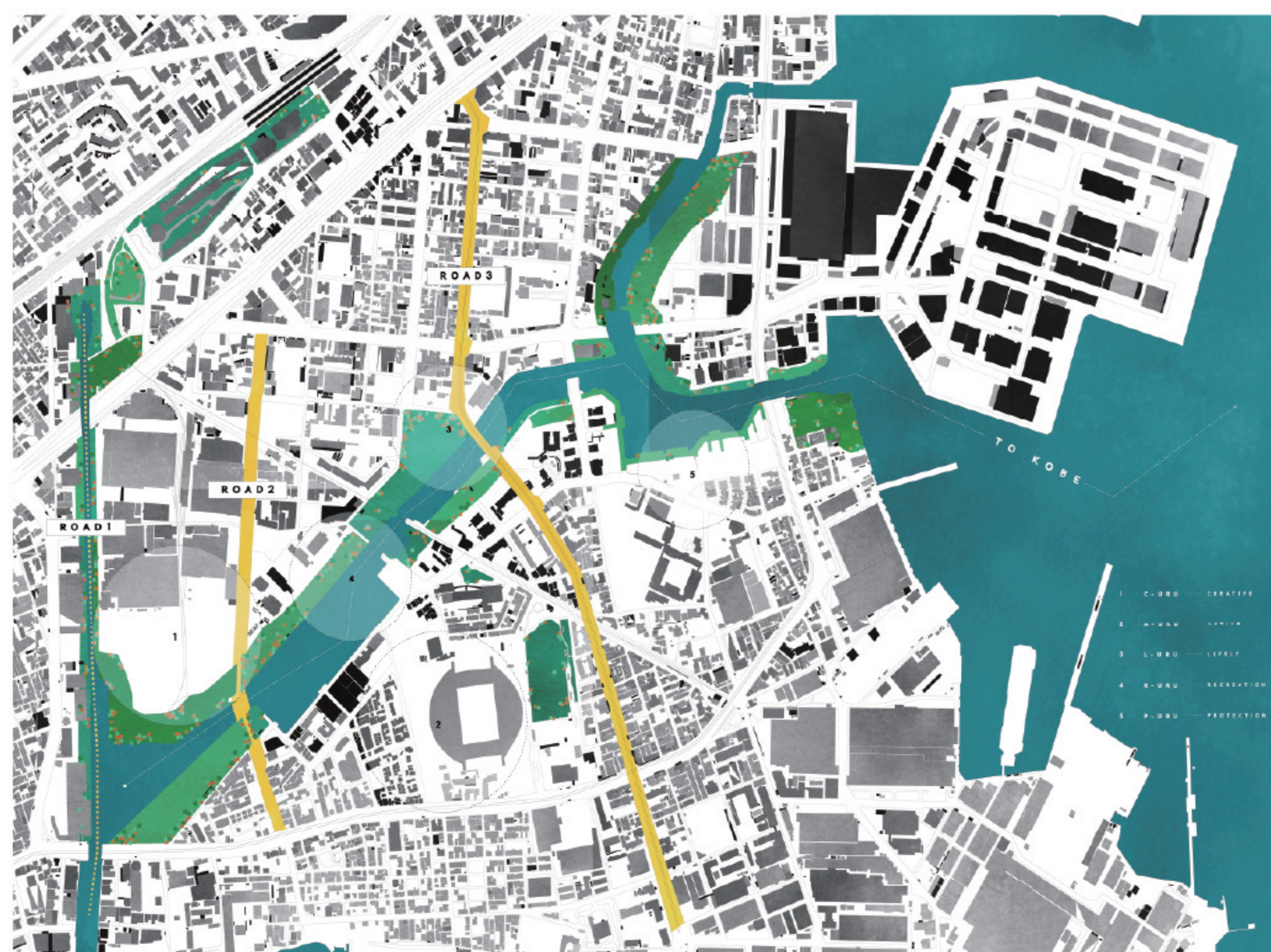


B 地区：兵庫運河ウォーターフロント地区

URUOI

黒木孝司 向上沙希 谷口浩都 檀野航 吉川文乃 (槻橋研究室)

運河、工場などといった街を構成する要素と、「人」との乖離が進行している。それらをつなぎとめ、街と人の関係と、街自体が本来持っている潜在的な豊かさについて再考する。



[担当教員(後半)]

吉武宗平(鳳コンサルタント)

岩瀬諒子(岩瀬諒子設計事務所)

近藤民代(准教授) 栗山尚子(准教授)

[Teaching Assistant]

秋田湧大(A67) 中倉俊(A67)

課題：パブリックオープンスペースのデザインを核にした Livable City 神戸の創成

■課題趣旨・目標

前半の都市デザイン課題では都心部のウォーターフロント地区と兵庫運河ウォーターフロント地区を対象に都市地域再生のマスタープランを作成した。後半のランドスケープ設計課題は未来の地域の拠点として都市の活力を牽引するパブリックオープンスペースのデザインである。都心・兵庫運河ウォーターフロントへ広がる面上の敷地に都市への戦略を保持しつつ微細な空間や環境を併せ持つ魅力的な拠点オープンスペースを構想してほしい。新しい都市のライフスタイルや多様なプログラムを許容する空間、様々なスピードや流れに対応するデザイン、高い回遊性を持ち、新しい都市のライフスタイルを創造する場所、都市に変化を呼び込むランドスケープデザインに挑戦する。

■課題の進め方・ポイント

- ・前半課題のマスタープランの中で拠点となるオープンスペース(具体的には広場、公園、道路、歩行者空間、土木施設、埠頭、工業跡地、公開空地など)を選定する。グループの中で選択した拠点オープンスペースを組み合わせることで都市にどのような活力をもたらし、変化を起こすのか目標を設定する。
- ・都心部とウォーターフロントの関係性を再考し、都市における新しい水辺の意味を考える。
- ・拠点とする対象敷地の周辺1街区程度(拠点エリア)も拡大した対象敷地として捉えデザインコンセプトを構想する。
- ・敷地における環境条件などの直接的なコンテキストと、経済・文化・社会・生態などより広い概念のコンテキストの双方を理解し、設計を進める。
- ・対象敷地(拠点)と周辺エリア(拠点エリア)においてどのようなランドスケープ操作が都市活性化のツボとなるのかを敷地周辺の操作も考えつつ設計を進める。
- ・面的な敷地における地形操作、植栽・水・小構造物等ランドスケープから発想する敷地デザインを学ぶ
- ・プログラムやアクティビティを構想し、都市内の回遊性を高めるだけでなく多様な利用を誘発するデザインの仕組みをつくる。
- ・都市スケール～身体スケールにおけるデザイン操作を行い、スケールの伸縮と操作の有効性を立面・断面・詳細などの検討を通して空間の設計へとつなげる。
- ・個別の設計を進めながら課題の大きな目標に対してグループ・メンバーの個別の敷地デザインがどのように全体に作用しているか、確認しながら設計を進めること。

■学外展覧会への出展

- ・京都ランドスケープデザイン展 2019(京都造形芸術大学)

■設計キーワード

都市広場、立体公園、水のランドスケープ、パブリックとプライベート、回遊性、多様性、ピア・スケープ、テラス、屋上、半屋外、中間領域、スポーツ、身体性、速度、アクティビティ、生活、劇場、多機能、変化、時間とプロセス、物語性、水平性と垂直性、都市の庭、歩行者空間、自転車、スケートボード、ウォーターフロント、海上公園、眺望、階段、ランドフォーム、複層的、人工地盤、気候変動、雨水、防災拠点、ファニチャー、ポケットパーク、ウォール、植物都市、パブリック、インダストリアル・ランドスケープ、テクスチャー、記憶、リノベーション、レベル差、スロープ、ショッピング、健康、子供の遊び場、エコロジー、食、眺望、ショッピング、森、自然と人工物、夜のランドスケープ、光

■講評会の様子

[ゲスト講評者]

春元崇志(神戸市企画調整局未来都市推進課) 川瀬葉月(同左)



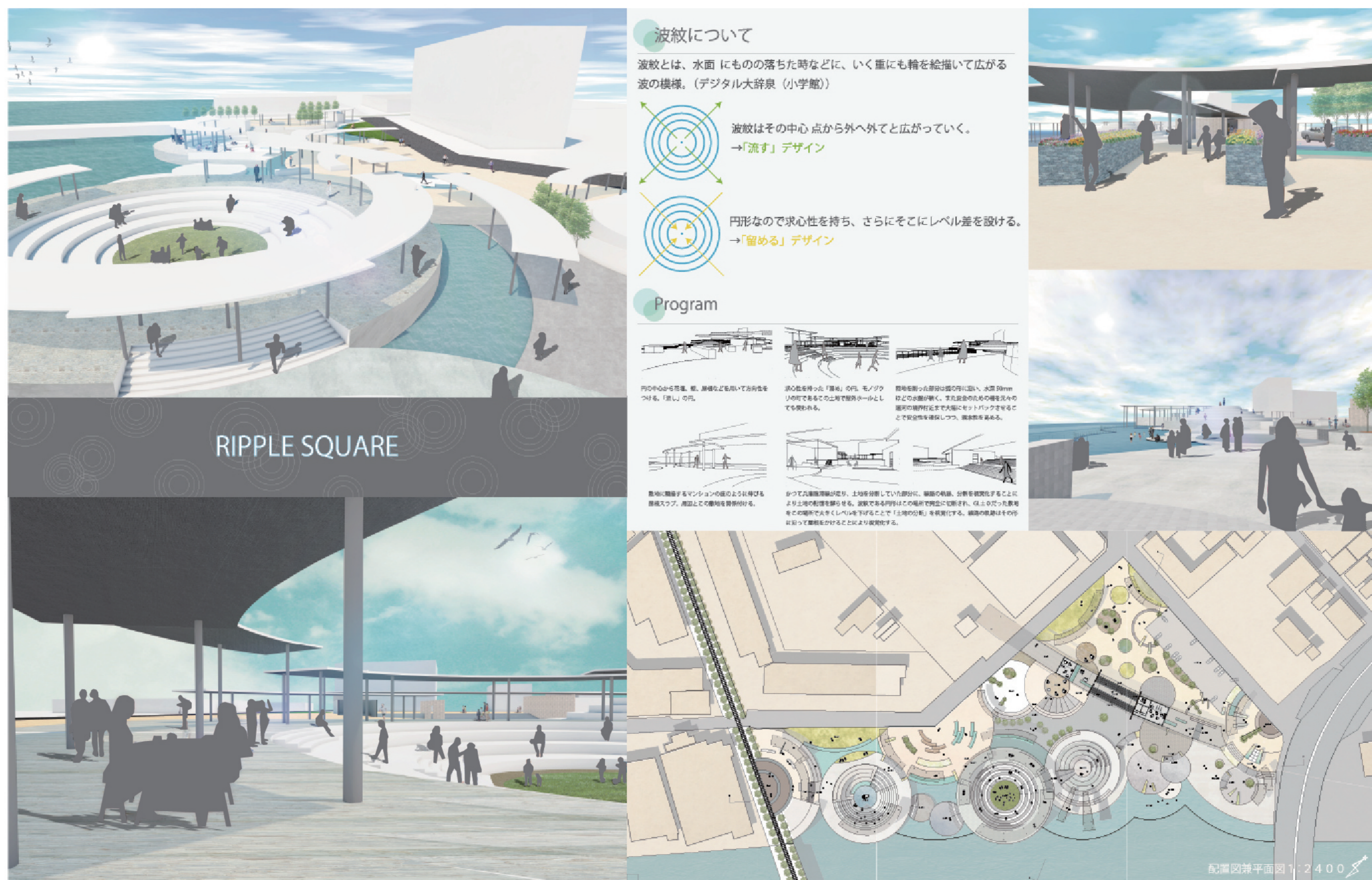
上山貴之、小池晃弘、田中駿介、檀野航



RIPPLE SQUARE

高橋和志 (黒田研究室)

かつては工場、町工場が栄えるとともに運河も賑わっていたが、現在では工場も廃れ、運河は遠い存在となっている。ここに「波紋」というデザインを施すことにより人々を再び水に近づけつつ、流れを造る。「人の流れの起点、かつ溜まりの場となる空間」の提案。



水際線を彩る

細江寛子 (栗山研究室)

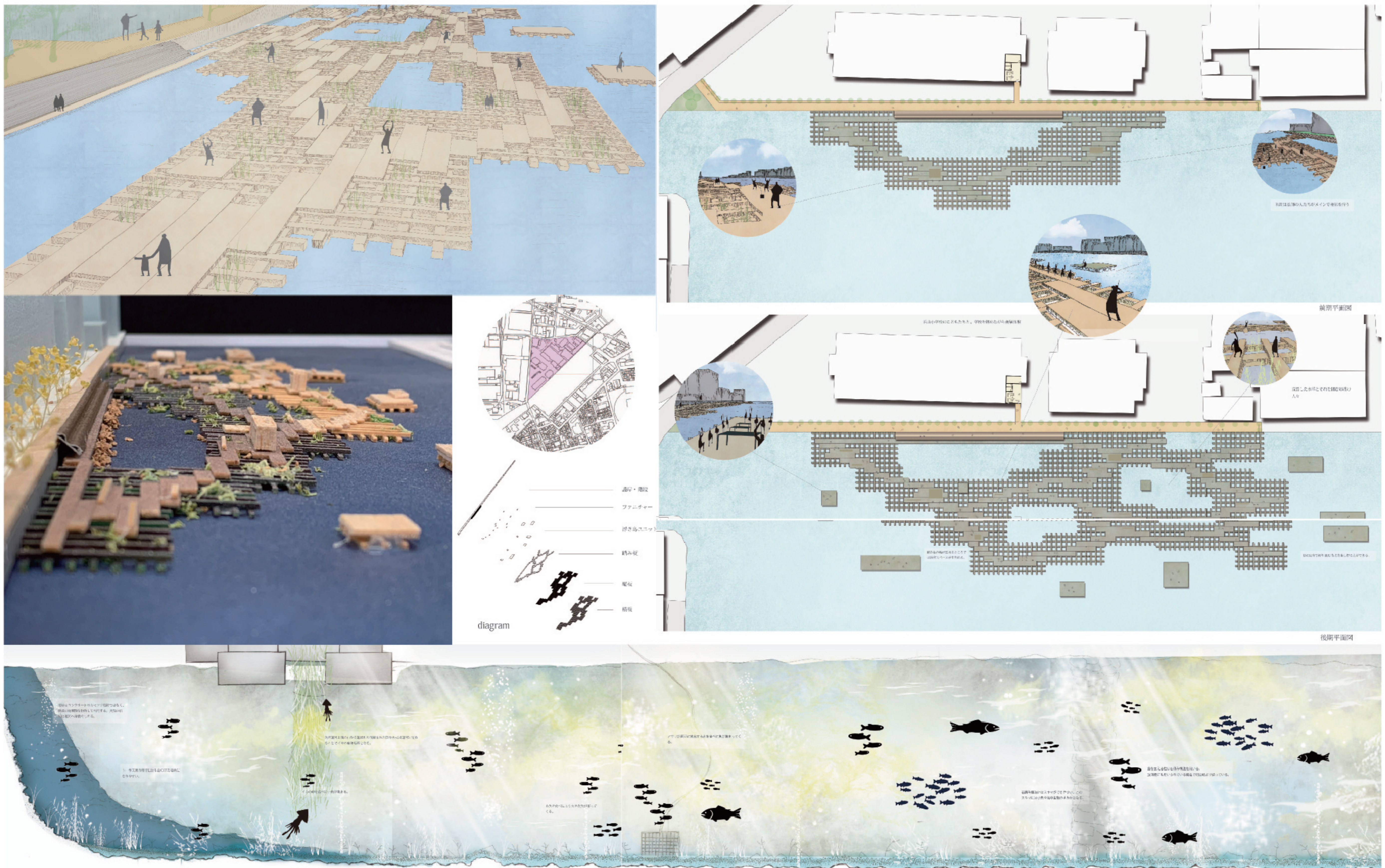
かつて材木町として栄えた歴史があるが、今はその姿がなくなってしまった。兵庫運河の水際線の形を新たにデザインすることで、昔の風景を再編し、ここを訪れる人々から見える風景の変化に幅を持たせる。



今と未来で紡ぐ道

鈴木滉一（栗山研究室）

兵庫運河で実験的に行われているアサリの養殖に着目し広告塔として機能する養殖場を考えた。養殖に用いられる浮き桟橋が構造体となり、養殖の輪が広まるにつれてこのランドスケープは伸び続け道行く人に訴えかける。川辺の小さな道を今と未来で紡いでいく。



ルート上プロムナード

三日市絵梨（近藤研究室）

「食」をテーマとし、浜山小学校南西側の敷地に運河を見通すことができるレストラン街を設置する。従来のプロムナードの配置を変え、広場やコミュニティーガーデンなどの新たな食のアクティビティを設ける。訪れる人々、住民が地域に根ざし賑わいのあるまちを目指す。

